

ペルー考古学における「様式」概念

市木尚利¹

要旨 本稿はペルー考古学における様式概念の導入とこれまでの歴史を振り返り、その理論的成果と課題を模索することにある。近年、「技術様式」が土器工人の出自やネットワークを明らかにしていく上で重要な分類技術の一つとして提唱されている。地域固有の儀礼土器の製作を支える土器製作者間のネットワークの実態を把握することにより、表面的な土器の形態やイコノグラフィーの類似で括られる分布範囲のみにとらわれずに集団間関係を実体化させていくことが目指されている。様式概念の成果は地域の物質文化を具体化してきた点にある。しかし、異なる様式間で共有される土器や器種構成の変化、同じ様式の分布範囲内に生じる地域差などについてはその理由が明確にされてこなかった。今後の様式による分類のあり方を考えるため、ペルーにおける様式論の研究史を整理し、今後の課題と展望をえたいと考えている。

キーワード：様式、文明、技術様式

I はじめに

世界各地の考古学において様式に基づく分類は定着し、欠かせないものとなっている。ペルー考古学においても同様である。19世紀末にペルーへ様式概念が導入され遺物の分類と編年研究がアンデス文明の起源と発展過程を明らかにすることを目的に開始された。文明化の発展段階と様式は共伴関係であった。しかし、1960年代になって大きな転機を迎えることとなった。様式は遺物の編年及び空間的位置を規定するものであるが、決して発展段階を示すものではないことが唱えられたからである。様式を巡る議論が盛んであった。



図1 ペルーと小論での関係地

しかし、現在ペルーやワウラ（Huaura、図1）などにおいては様式概念を扱った論文

1：立命館大学文学部

はほとんどみられなくなり、同概念について現在どのように考えられているのかが不明となっている。そのため様式をそのまま文化や民族の単位として分類することが続いたり、用語の統一がみられない事例があったりしている。そして、様式に関する新たな提言も議論の対象にはなりにくくなっている。

そこで、小論ではペルー考古学における様式概念の研究史を振り返り、現在までどのような課題をのこし、どのような試行錯誤がなされているかを明確にしておくことが今後の様式論を考える上で必要である。このことから、小論では様式を巡る議論を①19世紀末から1950年代と②1960年代から現在までと大きく二つに分け、様式をめぐる議論を時系列に沿って整理し、課題をまとめている。

II 19世紀末から1950年代までの様式論

1 ペルー考古学への様式概念の導入—19世紀末から1940年代—

様式概念が物質文化の分類技術となっていく背景に、19世紀ヨーロッパでの文明・文化概念の普及と定着がある¹⁾。19世紀、文明と文化の区別は曖昧であり重複するものであったが(ウィリアムズ2011:88)、基本的には野蛮社会とは異なり、文明や文化をもつ社会は「秩序」をもっており、その「秩序」は物質文化に表象するものと想定された(ニーチェ1993)。シュペングラーにおいても同様である(シュペングラー2017a・2017b)。大様式は、「大きな文化の根源的象徴から出るもの」と考えた。そして、芸術にこそ人間の本质とその存在意義が凝縮して現れると考えた(シュペングラー2017a:207)。様式が物質文化にみられるかどうかは文明・文化をもつ社会かどうかを判断する基準となり、近代考古学での物質文化の分類作業を支える方法論となっていくと思われる。

なお、小論では、文化(culture)は地域の生態系に根差した人的行為の総体である生活形式と考え、文明(civilization)²⁾は歴史的な発展段階の一つであると同時に他地域へ広く移植可能な要素を含みこんだ生活形式であると考えている。両者は実態として重複する部分は多いが区別すべき用語である。

さて、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アンデス考古学の父として知られるマックス・ウーレは様式概念を導入し編年研究を実践した(Uhle 2003(1903))。1903年では、海岸ティアワナコ様式よりもクオリティが低く、粗雑になる時期の指標となる様式として「エピゴナル様式」という概念を設定した。つまり、ティアワナコ様式からエピゴナル様式への変化を想定したのである。しかし、後年には様々な文化的要素が混成した様式であると再定義するにいたった(Uhle 1956(1935))。

一方、土器群への呼称に様式ではなく、「型式(タイプ)」として使うことも少なくなかった。様式とするか型式とするか判断するまでにいたっていない土器群も多かったのである。例えば、1930年代のペルーでは、現在私たちがチャンカイ様式と呼ぶ土器群に対

して様式ではなく、型式の概念で呼称されていた。ペルー考古学の父として知られるフリオ・C・テーヨは、層位的発掘の成果を踏まえて「プレチャンカイ式」と「チャンカイ式」の2型式に大きく分類し、編年案を提示している (Colán *et al.* 2015 (1935) : 24-26)。さらにコランらはテーヨの分類と編年に、「新チャンカイ式」を追加している。だが、様式としては呼称されなかった。メヒア・ヘスペにおいても、現在はチャンカイ様式として知られる土器群を型式によって分類し「チャンカイ式」と呼称している。まだ明確にチャンカイ様式という記述がみられないのである (Mejia Xesspe 2016 (1937))。

ところが、別の土器群に対しては様式を用いられた。例えば、チャンカイ河谷よりも北部に由来する、特徴的な図像文様をもつ土器群を「サンタ様式」と呼称している (Mejia Xesspe 2016 (1937) : 40)。もちろん、文字として記録されなかったが、「チャンカイ」で出土する土器群が独自の様式であり、固有の文化単位としての認識を強化していく途上にあったとは考えられる。ただ、1930年代までは出土する土器群によっては「様式」とするか「型式」とするかで見解が分かれていた³⁾。

2 様式とホライズン—1940年代～1950年代(1)—

様式概念とあわせてアンデス考古学での編年研究における重要な概念に「ホライズン」がある。この用語は1940年代から1950年代までの考古学研究で大きな議論の対象になってきた。ホライズンは、ある中心地から特定の様式やその文化的要素が短期間且つ平面的に広がった状態を指すものである。そのような広範囲に影響を与えた様式は、ホライズン様式 (Horizon Style) として呼称された (Kroeber 1944)。このホライズンというアイデアは、ウーレによって地質学から導入されたものである (Muelle 1960)。1940年代から1950年代までには、以下のような三つのホライズンが設定されていた (Horkheimer 1950 : 266-267, Willey 1948)。

- ①チャビン・ホライズン (Chavin Horizon)
- ②ティアワナコ・ホライズン (Tiahuanaco Horizon)
- ③インカ・ホライズン (Inca Horizon)

クローバーは、さらにネガティブ技法の装飾をもつ土器をホライズンと定義しうる様式と考えた。この様式をチャビン様式とティアワナコ様式の間位置付け、自らの編年体系に加えている (Kroeber 1944)。クローバーは、土器の編年の位置を決める指標として、これらのホライズンの有効性をみている (Kroeber 1944)。

クローバーは著書『様式と文明』において、様式とは文明の物質的表現であること、文明は様式として発展した技術や生活のあり方など社会的行為を普遍化させる原動力であることを指摘した (Kroeber 1957 : 150)。クローバーは文明の本質が様式に表象するものと考え、理論的密接なものとした。文明にはそれぞれ高いクオリティをもつ特殊な様式がある。それは、個性あるものとして他の文明と区別されるものである。たとえ由

来の不明な遺物であっても、ある様式で製作されているならば、歴史的な位置づけができる。また、そのような遺物は、特定の文明がもつ様式の発展過程における、ある特定の時期のものとして位置づけることもできるとした。よってクローバーは、文明の生み出した物質文化、つまりより精巧な製作品にこそ、秩序ある様式が表象していると考えた。そして、そのような様式はクローバーにとって文明の本質を示すものであった。

同時に、個性ある文明群の間にも共有されるクオリティが物質文化に表象していることから、大様式が設定可能であるとも考えていた。クローバーは、大様式を提唱したニーチェの文化概念について紹介し、「文化は一国民（一民族）の全生活態度にみられる芸術的様式の単位である」という言葉を引用している。クローバー自身、「超様式 (super-style)」、「様式群の様式 (a style of styles)」、「生活の全体様式 (a total style of life)」(Kroeber 1957: 88) と呼んでいるように、様式にも抽象度の異なるレベルがあることが論じられている。建築物、衣服、料理などそれぞれ個別に見られる様式があり、それら全体を統括するような共通のクオリティを表象する様式があると考えられた。

このような視点に立てば、西洋各国の文化には共通する、歴史的に形成されてきたクオリティがあり、それが西洋文明の様式であること、それにも起源があるという論法が可能になる (Kroeber 1957: 88-107)。文明を生み出し、それを形作る本質を明らかにすることは難しいが、文明が形に残したものを理解することがより重要という認識である。そして、それを研究することで、文明の本質について考えを深めることが可能であると考えた。

ホライズンとして広範囲に広がる様式、つまり「ホライズン様式」と発展史観の各段階とを結びつけた研究は、ゴードン・R・ウィリーらによっても継承されている。彼らにとって「型式」は研究者が任意に設定した分類の単位であり、編年及び空間的位置づけを決定するために必要とした基礎的単位であった。そして、型式間の相互関係を様式として分類したのである (Ford and Willey 1949, Willey 1948)。この作業の結果、中央アンデス地帯における先史時代には大きく三段階の変遷があると考えられた。そして、以下のように各段階の始まり、場合によっては終わりにホライズン様式の時期が設定されている。

- ①形成段階 (Formative stage) : チャビン・ホライズンに始まり、末期には赤地白色土器ホライズン (White-on-Red horizon) が広がる。
- ②地域古典段階 (Regional Classic stage) : ネガティブ・ホライズン (Negative horizon) に始まる。
- ③拡大段階 (Expansionistic stage) : ティアワナコ・ホライズンに始まり、インカ・ホライズンが最終局面として広がる。

このような発展の各段階にホライズンを組み合わせて編年を構成している。興味深いのは、③拡大段階のティアワナコとインカの両ホライズン様式には、他の地域様式との

関わり方に違いがあることが認識されている (Willey 1948 : 14)。ティアワナコ様式の場合には、地域に大きな影響力を与え融合したような様式が数多く生産されたが、インカ様式の場合には、そのような状況があまりみられず、地域の様式がそのまま継続していることを示唆している。この示唆はその後の研究を考えると非常に卓越したものだと思われる⁴⁾。

ところが、「ホライズン」の定義と編年上の扱いには以上に述べてきた北米の研究者らと、ペルー人考古学者らとの間で違いがみられる。例えば、フリオ・C・テーヨの弟子であったメヒア・ヘスベの編年でもホライズンが採用されているが、彼は当時のメキシコと同様に「文化的ホライズン (Horizonte cultural)」(Caso 1952) という概念を駆使し、それによって編年体系を構築している⁵⁾。

テーヨの死後、メヒア・ヘスベは、独自の編年観を前面に出し始める。特に1950年代半ば以降には、カトリック教皇大学でのペルー考古学の講義では、以下のような3つのホライズンを設定して文化の変遷を解釈している。

- ①古段階ホライズン (Horizonte Inferior)⁶⁾
- ②中段階ホライズン (Horizonte Medio)
- ③新段階ホライズン (Horizonte Superior)

注目すべきは、1956年に発行された『カスマ河谷の考古学 (Arqueologia del Valle de Casma)』である。著者名は、テーヨになっているが、メヒア・ヘスベによる編集のもとに出版されているものである。テーヨ自身が1940年代までに発表している著作物では、このホライズンを用いた編年体系はみられない。そのため、テーヨの名前を用いながら、メヒア・ヘスベが自説を発表したともと考えられる⁷⁾。

この著書では、文化的ホライズンの概念が採用されているが、ホライズンとはどのように考えられているのであろうか。そのことを考える手がかりがメヒア・ヘスベの死後にペルー・カトリック教皇大学に寄贈された生前のメモが「メヒア・ヘスベのアーカイブ (Archivo de Mejia Xesspe)」として整理されている。その中に収められている「tmx-0273」には、まずメンゼルのホライズンを以下のようにメモをのこしている。

ホライズン：用語ホライズンが示したいのは、次のことである。ある特徴的な、あるいは特定の文化的伝統が、その時まで孤立していた文化 (文化単位) をむすびつけて広い地域に普及していった、相対的に短期間のことである。メンゼル 1958年彼は、1958年時点でメンゼルがいうホライズンの定義について、上のように理解している。その上で、自らのホライズンを、メンゼルのそれとを区別して用いている。メヒア・ヘスベは、まず「文化的エリア (area cultural)」を定義している。これは、特異なパターンをもつ、ある民族集団の物質的かつ精神的表現が支配的な空間をいうようである。そして、ホライズンとは、先に述べたような文化的パターンがそのまま維持されている時期のことを指している。メヒア・ヘスベはこの考えに従い、アンデス文明の編

年として三つの文化的ホライズンを設定しているのである。そして、時期が新しい順に、インカ→ティワナコ→チャビンと遡ることができることを、先行研究に従ってまとめている。

北米の研究者らとメヒア・ヘスペの間で違いがありつつも、ホライズンと様式は発展段階を示すものとして認識されていた。遺物の分類もこのようなホライズンと様式を前提に行われていたと考えられる。さらに新進化主義の立場からの型式概念⁸⁾も加わることもあり、分類の根幹を支える理論及び方法論を揺るがすような学問的状況があったと思われる。

3 ホライズン様式への批判—1940年代から1950年代(2)—

1950年代後半から、ホルヘ・ムエジェ (Muelle 1960: 15) は、ホライズンと様式は必ずしも一致するものではないため、両概念を結びつけることに批判的であった (Muelle 1960: 15)。そして、ホライズンを使うことを避け、「器種構成 (complejo morfológico)」という用語を採用している。器形には機能があり、その機能は様々な素材や他の様式にも普及・定着し、共に衰退するものと考えられた。異なる様式間であっても連動し変化するものと想定された。

また、様式は文化と一致するものでもないことが指摘されている。様式はあくまで遺物を編年として整理し分析する上で有効な技術であることが意識されており (Muelle 1960: 26)、考古学者自らが設定した様式を、無条件に歴史的事実として扱わない限り、その用語の使用を否定していない。そして、それまでの考古学研究を踏まえて以下のように特徴を挙げて、定義を試みている (Muelle 1960: 16)。

- ①特殊性とオリジナル性がある表現方法。
- ②色彩、線、構成に趣好があること。
- ③素材や内容からは独立しており、他の素材や様式と同じ内容を扱うことができること。
- ④ある特定の民族にオリジナルで、特徴的なもの。
- ⑤抽象的なもの。
- ⑥超越性があり、特定の遺物だけに特化するものではないこと。
- ⑦分類しうるもの。
- ⑧選別された、よりよいクオリティをもつ製作品をつくりだすこと。
- ⑨形成と解体の時期があること。
- ⑩継続性をもつこと。
- ⑪原型となるものが存在すること。

以上のように、ムエジェは様式を定義するための特徴をあげた上で、各地域に分布する遺物を整理し呼称するために様式を採用している。様式によって編年を構築すること

を目指していたと思われるが、それは歴史の発展過程は単一ではなく、地域ごとに多様な発展過程があることを意識していたためと考えられる (Muelle 1960 : 20)。

加えてムエジェは「型式学的研究 (Un estudio tipológico)」と題した小論文をあらわしている (Muelle 2009)。しかし、ここでは型式とは何かを定義する内容にはなっていない。日本考古学の弥生土器研究で重要な「形式 (フォーム)」研究とも言えるような内容である。ムエジェは型式 (タイプ) について言及せず、考古資料の「形式」とその発展に着目した研究の重要性を訴えている。

ムエジェによれば、形式は様々な素材の間で貸借を通じて共有されるものである。ある形式は何らかの機能を持ち、特定の素材で製作され始める。例えば、石材で斧形の石器を製作する。やがて、その斧は石材のみならず、木材や金属などの素材でも製作されるようになっていく。さらに、共有先になった素材から元の素材に「形式」が還元されることもある。つまり「形式」の共有化が貸借を通じて、様々な素材間で起こることを指摘したのである。このような現象をムエジェは、「形式の貸借関係 (Prestamos de forma)」と名付けた (Muelle 1960 : 27)。この形式の発展・拡大が様式発展の核になっていると示唆した。様式は形式の機能とその変化という視点から考えられるよりも、ある時期や民族集団の証のようなものとしてとらえられてきた。

しかし、ムエジェの指摘するところによれば、様々な素材間で形式が共有されるためには、素材に応じて形態と機能を付与する技術とその発展が欠かせないのである。そして、機能をもつ形式は、使用目的、素材、形にする技法によって決定される。このような機能に着目した分析が様式間関係を考察する際にも重要と指摘している。各様式で外見上の違いが認められても、特定の技術によって生み出されている。そして、形式の多様性や変化は、素材の違いが原因で生じてきたと指摘している。形式の機能分析によって様式や様式間関係の理解を深める必要性を主張したのである (Muelle 1960・2009)。おそらく、外見上の違いから分類された遺物の分析にとどまらず、機能と技術の観点からも分類・分析しなくては、様式変化や様式間関係の実像にはせまれないことを示唆していたと思われる。現在においても、後述するようにガブリエル・ラモンが「技術様式」の観点から様式間関係や実際に製作した工人のアイデンティティを明らかにしようとする研究を実践しその重要性を主張していることを考慮すると (Ramón 2013)、ムエジェの提言は非常に重要な内容を含んでいるのである。

Ⅲ 1960年代から現在までの様式論

1 様式と期 (ピリオド)

1960年代以前、歴史的な発展段階には、それを特徴づける様式があるという認識である。ウィリーなどの研究者は、様式と発展史観の各段階を対応させようとする傾向が

強かった。しかし、様式と発展史観の結びつきに対して批判したのが、ジョン・ロウである。彼は、ウーレ以降、北米研究者たちが採用してきた様式と発展段階が混在していることを指摘し、様式は社会のある発展到達段階を示すものではなく、期を示すのみであることを指摘した (Rowe 1962)。このロウの研究は現在まで影響を与え、様式研究において大きな転換期となっている。

ある特定の地域を対象にして編年を組み立てる場合、ある物質が同時代のものか、異なるものかを区別していかなければならない。相対編年とは、その物質が同時代なのか、前なのか後なのかを判断しながら、組み立てるものである。発展段階論にとらわれず、ただ時期が同じなのかどうかを判断する基準が必要だった。そこでペルーでの調査成果をもとに、ジョン・ロウは、1962年に土器様式の変遷を、「ホライズン (horizon)」と「中間期 (intermediate)」の両概念を駆使して編年案を提唱した (Rowe 1962)。ロウらの編年案は、集落や墓域から出土した儀礼土器の形態やイコノグラフィーの変化によって時期の変化を示したものである。ロウやドロシー・メンゼルらは、様式を単純に、時間と空間と変化の方向性を特定する手段として利用した。そして、様式によって分類される土器群は地域固有であるが、様式間には、宗教的イデオロギーの伝播と普及が反映されていると考えられた。この理論的基礎によって編年試案の提唱と、ワリ文化拡大の背景にある地域間の繋がりを模索したのである。

この提言によって、ペルーでの様式研究は一つの画期を迎えることになる。ロウの研究は今日まで、大きな影響を与えることになった。ロウにとって、ホライズンは、ある特定の様式がアンデス地帯に広く普及し、ある種の文化的統合が見られる時期を指す。そして、中間期は、前期ホライズンと中期ホライズン、そして中期ホライズンと後期ホライズンのそれぞれに間に、多様な様式が各地域に発達した時期を指す。そして、土器の使用開始となる早期の時期を加えて、次のように編年を組み上げた。

- ①早期 (Initial period)
- ②前期ホライズン (Early Horizon period)
- ③前期中間期 (Early Intermediate)
- ④中期ホライズン (Middle Horizon period)
- ⑤後期中間期 (Late Intermediate period)
- ⑥後期ホライズン (Late Horizon period)

そして、各時期を細分するのに、エポックを採用した。ロウやメンゼルの従えば (Menzel 1964, Rowe 1962)、前期中間期を8つのエポックに分け、前期中間期エポック7あるいは前期中間期7のように呼称した。そして、ナスカ様式フェイズ7は、そのまま前期中間期エポック7に対応させた。さらにエポックを細分する場合には、アルファベットの大字を使ったのである。例えば、エポック7A、7Bのように表現した。ただ、編年から段階 (ステージ) を排除することで、ルンプレーラスを代表する経済発展段階で構成

する編年案も独立し、並立させることにつながった (Lumbreras 1960・1974)。そのため現在までペルーには二つの編年試案が並立している。但し、スチュワードのような型式概念は定着するにはいたらなかった。

2 ロウ編年の理論的課題

ロウらの編年案は広く受け入れられてきたが、理論的課題もある。この編年案には、以下のような理論的前提が含まれているとマコウスキらは指摘している (Makowski *et al.* 2011)。

- ①工人と土器使用者は流行に従い、今日の西洋社会に類似した行動をしていた。
- ②土器生産は中央集権的に行われ、交通手段や砂漠、険しい山岳地域など厳しい自然環境によって制約を受けつつも、流通していった。土器工人の形成は、中央集権的且つ教条的に効果を持つものでなければならなかった。
- ③中央アンデス地帯の宗教的信仰は、ある特定のセンターから循環的に、そして改宗に成功する方法によって、普及していった。結果的に、イコノグラフィーや儀礼土器をともなって広大なアンデス地帯に広まった。

こういった仮定は物的証拠によって裏付けられてはこなかった。アンデス地帯における実態として、土器はある特定の場所で集中的に生産されていなかった。小規模な工房において異なる地域の土器工人が交流し、生産されていたのである。そのため、地方・地域の様式的多様性は高いが、外来の土器様式の偶発的な模倣はほとんど考えられないようである。

加えて、こういった外来の土器様式は、日常的に全ての人々が使用したものではない。つまり、すべての考古学的コンテキストで共伴するものではないのである。このような理由から、同じコンテキストでも、「中間期」の終わりなのかもしれないし、「ホライズン」の最初の時期かもしれない。また、出土した遺物が地域特有なものかどうか、外来様式の模倣品なのか、あるいは搬入品なのかによっても解釈は変わってしまうのである。

このような課題はありながら、現在まで、ペルーではロウやルンブレラスがそれぞれ提唱した二つの編年案がそのまま並立している。それを各研究者が組み合わせながら、個別に編年案を立てており、現在でもそれらの用語は大きな影響力をもっている。

3 第三の編年案について

地域の実態に即した編年案を確立するために、ペルー北海岸の研究者たちは、第三の編年案を使うことが多い。それは、土器のみならず、建築技術、建造物のパターン、埋葬儀礼にみられる行為、文化的連続性や断続性の状況を反映すると思われる物質文化のその他の様相全体に留意して設定されるものである (Makowski *et al.* 2011)。ロウやルンブレラスによって確立されてきた編年案では、地域レベルでの社会政治的変化も様式

変化も捉えることはできないために第三の編年案を設定している。

この編年案では、各時期に、モチェ期、ランバイエケーシカン期、チムー期のような、想定される民族文化の名称が与えられている。結果的に、この時期に使用される土器様式も同様の民族文化名を冠することになってしまう (Makowski *et al.* 2011)。このような問題も含んでおり、ペルー国内でも編年とそれを支える様式とあわせて検証をする研究者もいる⁹⁾。

4 フロンティアとインターアクションの実像

現在、様式論とあわせて取り上げられるテーマにフロンティアがある。フロンティア(境界)は固定されたものではなく、変動し続けるものであり、重複しあうものである (Lightfoot and Martinez 1995)。また、領域的に連続性がみられないこともある。よって、物質の分布範囲は水平方向に連続して広がることもあれば、飛び地のように点在することもありうる (Murra 2002)。

例えば、先史アンデス社会初の「帝国」とされるワリ(後6世紀半ば~11世紀)の拡大と衰退現象である。帝国の拡大と衰退にともなって、帝国と地域の諸集団の間でどのような関係が構築されたのか、そして解体しどのような地域間関係へと変化を遂げていったのかを考える上でフロンティアの概念が欠かせないものの一つになっている。中期ホライズンから後期中間期のカスマを研究対象としたメリサ・A・ヴォゲルはフロンティアについて次のようにまとめている。それは、少なくとも二つ以上の社会集団が相互に影響を与え合う場所であり、明確な線を引いて設定することはできない。集団間の政治経済のつながりが変化すれば、フロンティアも変化していく。そこでは、インターアクションの密度が高くなる。より活発な交流、友好的なものから敵対的なものまで行われたと考えられる (Vogel 2012)。

筆者が長年研究対象としてきワウラ (Huaura)、チャンカイ (Chancay)、アンコン (Ancón) などのペルー中央北海岸は、ワリの拠点であったアヤクチョ (Ayacucho) からみれば「周縁」である。しかし、インターアクションの密度は高くなり、在地の土器は外来要素を多分に含みながら個性を強く発揮しはじめる。筆者が調査研究を行ったワウラ様式図像彩色土器ではワウラ様式固有の人物型図像 (図2-1) とペルー北海岸で発達した要素と融合した図像が観察される (図2-2)。器形についても儀礼に欠かせない醸造酒の飲酒に用いるコップ形土器 (図2-2) はワリ様式やティアワナコ様式に由来するものと考えられる。そのためワウラ様式図像彩色土器成立の背景にある土器工人間の交流関係を明らかにしていくことがこのペルー中央北海岸での様式変容に関する基礎研究はフロンティア概念を検討していく上でも非常に重要と考えている。



図2 ワウラ様式図像彩色土器（筆者撮影）
1：ワウラ様式固有の人物型図像、2：ペルー北海岸の図像との融合図像

5 「技術様式」と「外的様式」：ガブリエル・ラモンの提唱

上述してきたようにフロンティアでのインターアクションの実態を多角的に捉えることは非常に重要な課題の一つとなっている。実際に、各地域に建設されたセンターでの儀礼やその準備過程において様々な社会集団に属する人々の間で直接あるいは間接的な交流が行われた。土器工人も同様である¹⁰⁾。

近年、ガブリエル・ラモン (Ramón 2013) がその著書『アルファレーロ・ゴロンドリノス (Los Alfareros Golondrinos)』で様式論に一石を投じる提唱を行っている。スペイン語で Alfareros は土器工人を、Golondrinos はツバメを意味している。人類学研究においてこの用語は、メキシコからアメリカ合衆国の南部へ綿花の収穫のために移動する労働者やイタリアからアルゼンチンへ小麦収穫のために大西洋を渡る労働者を指す用語であった。ラモンは長年ペルー北部を中心とした範囲で、20世紀から現在までの「季節移動する土器工人たち」を研究テーマの一つにしてきた。そして、Golondrinos という用語を適応させ、移動しながら各地域特有の様式を製作し続ける土器工人たちに焦点をあてた研究を行ってきた。

彼はこの著作の中で様式概念について検討し、新たな様式概念を提示している。19世紀後半からこれまでのアンデス考古学では、大勢として様式＝「文化」として捉えられ、民族アイデンティティとの関連の中で理解されてきた。しかし、ラモンは、インカ期や植民地時代、現在の民族考古学の調査・研究を踏まえてアンデス地帯、特にペルーで伝統的な土器生産は、移動する土器工人たちが担ってきたのではないだろうかと考えた。

よって、これまでの様式概念では、移動する土器工人やその出身を特定することが焦点にすることが難しい。そこで様式＝「文化」という図式を一度解体し、「動作連鎖」

の観点から二つの様式概念を設定した。一つは「外的様式 (Estilo Externo) あるいは装飾様式 (Estilo Decorativo)」で器形・類型そして図像・文様の外面的要素とその総体を指すものとされている。もう一つは「技術様式 (Estilo Tecnico)」である。これは、土器製作の技術と総体を一つの様式としてとらえるものである。土器製作の技術がどの地域に由来するものか、つまり土器工人がどこで製作過程、製作技法を習得したのか、その起源を特定する研究を目的にして設定されたのである。

実際に、ラモンが長年実施してきた現地調査や文献調査などから、海岸地域での土器の外的様式を製作してきたのは、山岳地域の人々であることが明らかになってきた。よって、ある海岸地域にみられる土器の器形・類型や図像・文様は海岸地域特有ということのみで、その土器を製作した工人も同地域の住民とは言い切れないことを指摘している。

製作技術・技法は長い習得の期間を経て身につけたものであり、どんなに外見は別様式でも製作に用いられる道具やその使い方、癖が土器に出てしまう。このことを踏まえて、実際の土器工人とその出身を特定するには外面的な要素ではなく、製作技術・技法にこそ注目しなければならないと指摘している。この「技術様式」に着目して先スペイン期の土器についても再度研究していく必要があることを主張されている。

様式概念の導入によって文化とその変化を考察する対象として土器を検討することが可能になった。加えて、様々なアイデンティティが交差して土器が製作されている可能性も、ラモンの研究によって明らかである。この研究を批判的に発展させていくためにも広範囲で土器を集成し、分類・分析することが欠かせない。このことによってしか「技術様式」と「外的様式」についての検証を進めていくことができない。

IV 課題

ペルー考古学においても様式概念の導入によって、分類作業が進み、編年体系の構築と地域固有の物質文化の存在を明らかにし大きく進展してきたが、課題ものこされている。例えば、土器様式がそのまま文化や民族の単位やアイデンティティを反映するものとして解釈し続けられていることにある。結果、社会や文化の動的な変容を捉えづらくなっている。そのため以下の4点を考察するための分類を実践し続けていくことが必要ではないかと考えている。

- i) 異なる土器様式間にあらわれる「相違点」とその意味
- ii) 異なる土器様式間に「共通点」とその意味
- iii) 同じ土器様式分布圏内にみられる「共通点」とその意味
- iv) 同じ様式分布圏内にみられる「小地域差」その意味

また、土器分類の用語が一定しない事例も散見される。例えば、「壺」は「形式 (フォルム)」ではなく、「カテゴリー」として分類されている。そして、壺 A、壺 B などの

ように分類したときに、壺 A を「形式 (フォーム)」としている。壺 A 内の細分には、「タイプ」ではなく、「バラエティ」を用いるのである (Falconi 2008)。

本来は「アルファール (*Alfar*)」の概念を用いて分類を進めるものと考えている。これは、胎土や製作技術体系の違いに基づいて土器 (破片) を分類してグループをつくり、そのグループごとに器形やその細分を試み手順を踏むものである (Segura 2001)。この場合、壺形土器を一つの「形式 (フォーム)」として位置づけ、同一壺内の差異に基づいて設定されたものを「型式 (タイプ)」としている。筆者も同じ方法で分類を行ってきた。

上述したような点はごくごく基本的なことと思われる。しかし、この基本に留意して課題を克服することで、はじめて異なる土器様式間で共通する器形や製作技法についての考察を研究者間で深めることが可能になると考えている。さらに、同じ土器様式の分布圏内で現れる小地域差の意味も問い続けることが可能になる。近年、ラモンによる技術様式の提唱や、異なる土器様式間での類似した器種構成の変化に着目したウゴ・イケハラの土器研究 (Ikehara 2010: 11) から、これまでの土器分類とその意味を検証し今後につなげていくことが求められる¹¹⁾。様式研究についての提言を批判的に検証し、そして継承していく為にも欠かせないものと考えている。

V 結びに

様式概念は、考古資料を編年・空間的に分類・整理すると同時に地域間のインターアクションをはかる基準となり、地域社会の実体を解明することへつながるものとして発展してきたといえる。そのため、小論の筆者は様式に基づく分類と分析が今後も欠かせない重要且つ効果的な概念と考えている。しかしながら、様式の分類と分析によって何を明らかにできるのかについて議論の深まりが停滞している。そのような中で「技術様式」の提唱等がなされているが、製作行為に着目した分類をどのように現在の分類に組み込んで実践すべきか模索する基礎研究が必要になっている。技術様式の観点を組み込みながら、様式を有効に用いて遺物の分類を進め、地域に根付いてきた個性ある物質文化とそれを支えた多文化で多元的な人々のネットワークとその広がりを明らかにしていくことを継続していくことが今後も必要である。様式を有効に活用し続けることは地域の複雑性や多様性を明らかにする一助となるはずである。

謝辞

本研究は 2009 年から 2018 年までに行った研究成果の一部をまとめたものである。修士論文執筆に際し、「様式」についてペルー・カトリック教皇大学のクリストフ・マコウスキ博士から有益なコメントをいただいた。また、アンコン遺跡博物館、天野プレコロンビアン織物博物館 (前: 天野博物館) の方々にお世話になった。さらに、2013 年から 5 年間勤めたリマ日本人学校の先生方には調査時間をつくれるように勤務時間等を配慮していただいた。心より感謝の意を表したい。

注

- 1) 「文明」・「文化」概念がもつ国家イデオロギーへの批判があることにも留意しておきたい。例えば、西川長夫による文明概念への強烈な批判（西川 2001）があげられる。西川の場合、「私文化」という概念を提唱することで、文明・文化から一定の距離をとり、対象化を試みたのである。日本考古学からは寺前直人が近年の出版物で、縄文時代から弥生時代への変化は、文明化への抵抗であったという解釈を提示している。これは、レヴィ＝ストロースの野生概念を導入した上で展開されている（寺前 2017）。野蛮を低くみる思想への批判も込められている。小論では、地域の生態系と人的行為の相互関係を基礎に成り立つ生活形式と他地域へ移植可能な生活形式が実際にあると考えており、文化と文明によって物質文化では問題にすべきであるため両用語を用いている。
- 2) Civilization の訳語にあてられた「文明」であるが、伝統的な儒教世界における「文明」とは、「文章、文才、文教」によって「それを明らかにする、現わす、世に照らす」ものであった（許 2014：2-3）。それとは人として大切なこと、高貴な徳やそれに関わる諸行為等のことと考えられるが、西郷隆盛の文明観にみられるように、儒教世界の文明であり、慈悲慈愛の文明であった（山田 1939：8-9）。そして、それは人と人を差別するシビリゼーションではない。儒教的観点から、優美で荘厳な建造物、衣服などの物質文化を文明ということに批判を加えている。
- 3) 地域固有の土器とその一群に対して、様式概念を採用することもあった。例えば、ペドロ・ビジャル・コロドバは、チャンカイ河谷とその近隣地域で出土する特徴ある土器群に対して、チャンカイ様式と呼称している（Villar Cordova 1982：363-400）。ウーレ自身は、チャンカイ様式ともチャンカイ・タイプとも呼称される土器群があることを述べ、明確にはチャンカイ様式とは呼んでいない（Uhle 2003（1903）、1926（1904））。様式を用いる研究者間でも、用語の使い方に違いがみられた。
- 4) キャサリン・ジュリアンの研究をはじめ、インカの支配は物質文化そのものにはあらわれにくいことが指摘されている（Julien 2002）。インカ様式が他の土器様式に強く反映することはなかった。インカは農産物や天然資源の集積・流通、必要な生産数などの管理をすることによって制服地域を支配していたためと考えられる。
- 5) アルフォンソ・カソによれば、文化的要素の普及は、ある起源となる場所をもち、そこから広がっているものである。そして、各地域社会の日常生活に大きな変化や影響を与えている（Caso 1952：1）。その普及した要素が広範囲に広がっている状況が文化的ホライズンであり、それによって考古資料を分類し、編年を組み立てるのに有効であると理解されている（Caso 1952：9）。カソ自身は、以下のように編年を簡潔にまとめている。

①先史的ホライズン Horizonte prehistorico	紀元前25000年頃から前5000年頃か
②原始的ホライズン Horizonte primitivo	紀元前5000年頃から前1000年頃か
③古的ホライズン Horizonte arcaico	紀元前1000年頃から前200年頃か
④形成的ホライズン Horizonte formativo	紀元前200年頃から紀元後400年か
⑤古典的ホライズン Horizonte clasico	紀元後400年頃から後900年頃か
⑥トルテカ・ホライズン	紀元後900年頃から後1200年頃か
⑦歴史ホライズン	紀元後1200年頃から後1521年まで
- 6) 「前期ホライズン」「中期ホライズン」「後期ホライズン」とも訳せるが、メヒア・ヘスぺの編年は段階的変遷をもとに構成されたものである。ジョン・ロウの編年で用いられる前期ホライズン、中期ホライズン、後期ホライズンとは訳語として区別するために古段階ホライズン、中段階ホライズン、新段階ホライズンとしている。
- 7) 但し、注意すべきは、1930年代半ばに、テーヨは新聞記事で、古段階ホライズン（Horizonte Inferior）の用語を用いている記録があることをペルー人考古学者セルヒオ・バラサ氏の私信で知ることができた。この語が準備されていたということは、中段階ホライズン（Horizonte Medio）や新段階ホライズン（Horizonte Superior）も当然あったことを予想させる。テーヨ自身、いくつもの編年体系を試行錯誤していたのかもしれないが、ホライズンという用語を用いていたことを裏付けることができず、今後の課題である。
- 8) 外国人による調査研究が盛んなペルー考古学では新進化主義の北米研究者らの理論的影響も一時期みられた。ダーウィニズムの影響を大いに受けたスチュワードについては、型式のみで細分し、定義している（Ford and Steward 1954）。
 - ①形態的型式（Morphological type）：外見上の形態とその差異によって設定される型式。
 - ②歴史的指標型式（Historical-index type）：ある時間と空間を特定することができる、特徴

ある形態をもつものを型式。

- ③機能的型式(Functional type)：文化的な慣習から規定されるモノの機能に基づいて設定される型式。
 - ④文化的型式(Cultural type)：文化全体を分類する際に設定される型式。文化には共通の「型(パターン)」があるということが前提になる。
- 9) マコウスキは、様式はあくまで研究者が分析のために設定したものであり、「考古文化 (culturas arqueológicas)」でも、社会・民族・国民でもないことを主張している (Makowski 2017 : 144)。
 - 10) 例えば、これまでのアヤクチョでの遺跡調査の成果から「ワリ文化」を表象する物質文化の形成には、海岸のナスカ文化と在地のワルパ文化の土器工人による工房での技術交流が不可欠であったと指摘されている (Anders 1989、Cook 1994、Makowski 2005)。交流の結果、一地域内の物質文化に在り性のみならず外来的な特徴も発揮されたのではないかと考えられている。
 - 11) ウゴ・イケハラは土器研究について重要なのは、異なる土器様式間で、容量の面から大型の器形が共有される現象について指摘している点にある。形成期の土器を対象にした研究であるが、異なる土器様式間で大型の土器が使われはじめる現象を、神殿儀礼や公共性の高い儀式に欠かせないチチャ(醸造酒)生産との関わりを示唆しながらまとめている。

参考文献

- Anders, Martha 1989 Evidence for the dual socio-political organization and administrative structure of the Wari, State, *In The Nature of Wari: A Reappraisal of the Middle Horizon Period in the Peru*. R.M. Czwarno, F.M. Meddens and A. Morgan (eds.), pp.35-52. Oxford University Press.
- Caso, Alfonso 1952 Los Horizontes Culturales en Mesoamérica. *Universidad de México* 1 (67) : 1-9.
- Colán, Hermógenes, Domingo Díaz and Jorge D. Montalvo 2015 (1935) Estudios Arqueológicos del Valle de Chancay – 1935. In *Arqueología del Territorio Chancay*. Perter van Dalen Luna (ed), pp.23-32. Museo de Arqueología y Antropología Universidad Nacional Mayor de San Marcos
- Cook, Anita 1994 *Wari y Tiwanaku: entre el estilo y la imagen*. Fondo Editorial de Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Ford, James and Julian Steward 1954 On the concept of type. *American Anthropologist* 56 : 42-57.
- Ford, James Alfred and Gordon Willey 1949 *Surface survey of the Virú valley, Peru*. The American Museum of Natural History.
- Horkheimer, Hans 1950 *El Perú prehispánico. Intento de un manual*. Editorial Cultura Antártica S.A..
- Ikehara, Hugo 2010 Social Organization, Technology of Production, and the Function of Utilitarian Ceramics for Feasting during the Middle and Late Formative Periods in the Central Andes/Organización Social, Tecnología de la Producción y Función de la Cerámica Utilitaria de Festines durante el Periodo Formativo Medio y Tardío en los Andes Centrales, In *Comparative Perspectives on the Archaeology of Coastal South America/Perspectivas Comparativas sobre la Arqueología de la Costa Sudamericana*. Robyn E. Cutright, Enrique López-Hurtado and Alexander J. Martín (eds.), pp.45-62. Pontificia Universidad Católica del Perú, Center for Comparative Archaeology University of Pittsburgh and Ministerio de Cultura de Ecuador.
- Julien, Catherine 2002 Identidad y filiación por Suyu en el Imperio Incaico. *Boletín de Arqueología PUCP* 6 : 11-22.
- Kroeber, A. L. 1944 *Peruvian Archaeology in 1942*. Viking Fund.
- Kroeber, A. L. 1957 *Style and civilizations*. Cornell University Press.
- 許 時嘉 2014 『明治日本の文明言説とその変容』日本経済評論社。
- Leoni, Juan B. 2000 Reinvestigando Ñawinpuquio : Nuevos aportes al estudio de la cultura Huarpa y del periodo Intermedio Temprano en el valle de Ayacucho. *Boletín de Arqueología PUCP* 4 : 631-640.
- Lightfoot, Kent G. and Antoinette Martinez 1995 Frontiers and Boundaries in Archaeological Perspective. *Annual Review of Anthropology* 24 : 471-492.
- Lumbreras, Luis 1960 La cultura de Wari. Ayacucho. In *Etimología y arqueología*. Instituto de Etnología y

- Arqueología de la Universidad Nacional Mayor de San Marco (ed.), pp.130-226. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Lumbreras, Luis 1974 *Los orígenes de la civilización en el Perú*. Editorial Milla Batres S.A..
- Makowski, Krzysztof 2001 Las civilizaciones prehispánicas en la costa central y sur. In *Historia de la cultura peruana I*, pp.163-243. Fondo Editorial del Congreso del Perú.
- Makowski, Krzysztof 2004 *Primeras Civilizaciones*. Empresa Editora El Comercio.
- Makowski, Krzysztof 2017 Lo real y lo sobrenatural en las iconografías Paracas y Nasca. In *Nasca. Cecilia Pardo and Peter Fux* (eds.), pp.144-165. Asociación Museo de Arte de Lima.
- Makowski, Krzysztof, Milosz Giersz and Patricia Prządka 2011 La guerra y la paz en el valle de Culebras : hacia una arqueología de fronteras. In *Arqueología de la costa de Ancash. Milosz Giersz and Iván Ghezzi* (eds.), pp.259-270. Centro de Estudios Precolombinos de la Universidad de Varsovia e Instituto Francés de Estudios Andinos.
- Mejía Xesspe, Toribio Manuel 2016 (1937) Notas de las exploraciones en los valles de Chancay, Huacho y Supe. In *Arqueología del territorio Chancay. Peter van Dalen* (ed.), pp.37-64. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Menzel, Dorothy 1964 Style and Time in the Middle Horizon. *Ñawpa Pacha* 2 : 1-106.
- Muelle, Jorge E. 1960 El Concepto de Estilo. In *Antiguo Perú: Espacio y Tiempo. Trabajos presentados a la semana de Arqueología Peruana* (9-14 de Noviembre de 1959). Ramiro Matos (ed.) pp.15-28. Editorial Juan Mejía Baca.
- Muelle, Jorge E. 2009 Un estudio tipológico. *Boletín de Lima* 158 : .5-15.
- Murra, John 2002 *El Mundo Andino. Población medio ambiente y economía*. Instituto de Estudios Peruanos y Fondo Editorial Pontificia Universidad Católica del Perú.
- ニーチェ、フリードリッヒ 1993『反時代的考察』小倉志祥訳、筑摩書房。
- 西川長夫 2001『増補 国境の越え方 国民国家論序説』平凡社。
- Ramón J., Gabriel. 2013 *Los Alfareros Golondrinos. Productores itinerantes en los Andes*. Instituto Francés de Estudios Andinos y Sequilao Editores.
- Rowe, John 1962 Stages and periods in archaeological interpretation. *Southwestern Journal of Anthropology* 18 (1) : 40-54.
- Segura, Rafael 2001 *Rito y Economía en Cajamarquilla. Investigaciones arqueológicas en el Conjunto Arquitectónico Julio C. Tello*. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- シュベングラー、オズワルド 2017a『西洋の没落』I、村松正俊訳、中央公論社。
- シュベングラー、オズワルド 2017b『西洋の没落』II、村松正俊訳、中央公論社。
- 寺前直人 2017『文明に抗した弥生の人々』吉川弘文館。
- Uhle, Max 1926 (1904) Appendix Report on Explorations at Chancay. In *The Uhle Pottery Collections from Chancay. A. L. Koberer*, pp.293-303. University of California Press.
- Uhle, Max 1956 (1935) Las antiguas civilizaciones del Perú frente a la Arqueología e Historia del Continente Americano. *Revista del Museo Nacional* 25 : 33-72.
- Uhle, Max 2003 (1903) *Pachacamac. Informe de la expedición peruana William Pepper de 1896*. Fondo Editorial Universidad Nacional Mayor de San Marcos and Corporación Financiera de Desarrollo.
- Villar Cordova, Pedro E. 1982 *Arqueología del Departamento de Lima*. Ediciones Atusparia.
- ウィリアムズ、レイモンド 2011『(完訳) キーワード辞典』椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳、平凡社。
- Wiley, Gordon R. 1948 A Functional Analysis of "Horizon Styles" in Peruvian Archaeology. In *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*. W.C. Bennett (ed.), pp. 8-15. Society for American Archaeology Institute of Andean Research.
- 山田濟齋編 1939『西郷南洲遺訓』岩波書店。

【2020年12月27日受理】

“Style” in Peruvian Archaeology

ICHIKI Naotoshi¹

Abstract : This paper is to study a history of the concept of style in Peruvian archaeology, to look back on the history of the past, and to explore the theoretical results and problems. In recent years, the "technical style" that has been proposed has become one of the important concepts related to operational sequence to clarify the origin and network of potters. By grasping the actual situation of the worker network that supports the production of regional-specific ritual earthenware, it is aimed at materializing the intergroup relationship without being bound only by the distribution range which is enclosed only in the similarity of ceramic form-types and iconography. The result of the application of style concept for ceramic study is that it has detailed the local material culture. However, it has not been clarified why the regional differences occur within the distribution range of the same ceramic, why forms/types are shared between different styles, and why occur similar change among different styles. It is necessary to review the basic research of the ceramic style for the study of style in the future.

Keywords : style, civilization, technical style

1 : College of Letters, Ritsumeikan University